

# 日本語を海にたとえてみる

## 日本語を海にたとえると見えてくるもの

古来、語彙や文字は海や林や園などにたとえられてきました。日本では『言海』『辞林』『広辞苑』などの辞典が有名です。それでは、国立国語研究所が調査研究に取り組むときの日本語のたとえとしては、海、林、園などのどれが適切でしょうか。私は、海にたとえておもしろい問題を引き出すことができるように思っています。その理由として、次の三つのことを挙げるができます。

第一は、海には広がりだけでなく、深さもあるからです。国立国語研究所が調査研究の対象とする日本語は、話し言葉の上では日本列島の広がりや世代などによる幅広さでとらえる必要があります。書き言葉でも、公的な文書、報道の文章をはじめとしたさまざまな広がりがあります。他方、近世の言葉、中世の言葉などというように、歴史的な日本語の研究も必要だということが海というたとえでは引き出されます。

## 大量で質の高い調査に取り組む

第二は、もし日本語全体を海でなくて林や

園にたとえようと、そこに生育している樹木や草花の一つひとつについての配慮が必要になって、全体を大きくとらえる姿勢が弱まる恐れが出ます。よりよい調査研究は、大量で質の高い言語研究である必要があります。敬語研究にしても、例えばある企業の中の敬語行動はどうかとか、学校における生徒の敬語はどうかというような別の意味での個別的な問題の立て方が必要です。しかし、例えば「おっしゃる」や「申される」というような一語一語を取り上げて、その意味や用法についての考察を加えるといった内容は、調査研究の課題には立てない、むしろ、個々の研究者が個別的な研究に取り組めるような資料を提供する機関でありたいと考えております。

## 分かりにくい外来語の言い換えに取り組む

第三として、海は白波の立つ海面、水面下、中層水、そして、深層水などと分けることができます。白波のたつ海面の言葉は、流行語、新語、若者言葉などというように毎年興亡の姿を見せています。この海面の、特に白波の言葉は、一面でおもしろい問題をもっています。

す。しかし、次の世代に豊かで価値の高い言葉を受け継ぐという目的のためには、水面下の安定した言葉の調査研究が大切になってきます。それは、書き言葉では新聞や雑誌などで調査することができます。話し言葉では、少し改まった言葉の調査が必要になります。

## 日本語の海はいつまで汚れを浄化しつづけるか

この一年あまり、私どもは、白波に属する言葉として、分かりにくい外来語の言い換えの検討に取り組んできました。その取組に対して、「日本語は、古来、例えば漢字や漢語をはじめとして、外国から数多くの言葉を取り入れることによって大きく生長してきたはずだ。現在の外来語にしても、日本語に必要なだからこそ取り入れてきているのだ。どうしても、言い換えをしようとするのか」といった反対意見を聞くことがあります。この背後には、やはり、日本語を大海にたとえて、これまでもいろいろな汚れを浄化してきている、そのことによって海自体が豊かに育っているという思いがあるようです。しかし、どこには言いにくいのですが、海の汚染の問題が深刻になっていきます。私たちは、この豊かな日本語の海を、日々の言語生活によっていつそう豊かに、また、清らかに育てるようにしたいものです。

(所長 甲斐睦朗)

# 意味の世界の見取り図

## シソーラスとは

「シソーラス」という言葉を耳にしたことがありますか。『広辞苑』第五版（岩波書店）では、次のような説明がなされています。「(宝庫の意) 語を意味的類似により分類・配列したもの。分類語彙表。(以下略)」。通常の国語辞典は、五十音順に見出し語を配列していますが、それはもっぱら目的の語を検索しやすくするためです。言葉の重要な機能である意味の伝達を中心に考えれば、意味によって見出し語を整理する方法が本来的と言えます。このような方針で作られたものは、意味の世界を一覧する見取り図のような役目を果たすでしょう。

ところで、先の語釈の中に「分類語彙表」という言葉が出てきました。ここでは普通名詞として使われているようですが、本来は、特定の本のことを指しています。それが、昭和三十九年に刊行された『分類語彙表』です。同書は、現代日本語のシソーラスの草分けとして幅広く活用されてきました。今年一月に増補改訂版が出版されました。

## 『分類語彙表』の誕生

国立国語研究所では、創立直後から国語の合理化に資する基礎資料作成のために大規模な語彙調査を継続的に実施し基本語彙の選定に役立ててきました。日本における語彙の体系的な研究は、これらの語彙調査が契機となつて進展してきたと言つても過言ではありません。研究が飛躍的に進展した理由として、人文学では珍しかった共同研究体制を敷いたこと及びいち早くコンピューターを導入したことが挙げられます。

昭和二八年の報告書『婦人雑誌の用語』に、語彙調査の結果として、五十音順語彙表、使用率順語彙表と一緒に「意味論上の試み」として「分類語彙表」が掲載されました。日本語の通常の語順では、「語彙分類表」となるはずですが、そうならないのはこの事情からです。調査対象の語彙の意味分野別分布を調べるために作られたのが当時の目的でしたが、その後、調査対象に現れない語を追加して日本語の語彙が一覧できる本格的なシソーラスとして刊行しました。

## 多方面で利用されるシソーラス

シソーラスは、文章を作成する際に適切な言葉を探す手引きとして便利です。例えば、日本語では「おしゃべり」「饒舌じょうぜつ」のように、一般的に和語と漢語で文体に差があります。文体の違いを理解して適切に運用することが社会生活上重要ですが、改まった表現は日頃使っていないとなかなか思い出せないものです。そのようなときに、日常語の方を手掛かりにして語を探すことができます。

シソーラスは、学術的にも有効に活用されています。文学作品の表現の分析や異なる語彙体系の比較など語彙研究の基礎資料として、また、最近では、言語処理や認知科学の基礎データとしても関心が高くなっています。

音韻や文法と同じように、語彙にも体系性が認められるというのが、現代日本語研究の基本的な立場です。その意味で、シソーラスは、すべての語はそれを取り巻く体系の中で効果的に運用されているという考えの一端を具現化した資料であるとも言えます。ただし、語彙の体系は、複雑で多面的な関係を構築しているはずですので、紙の上に二次元的に表現するのはそもそも無理があります。語彙体系の多面性を考慮した進化したシソーラスの登場が待たれます。

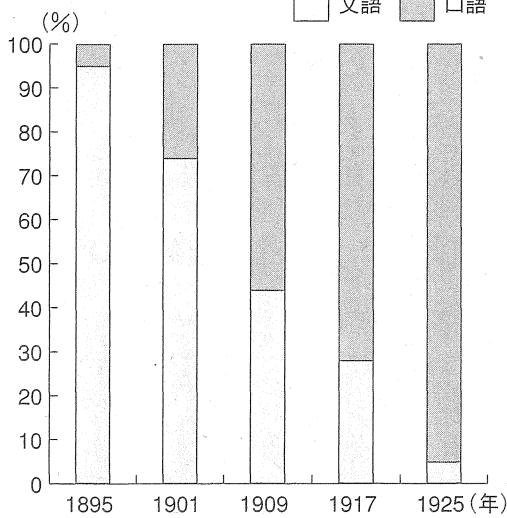
(研究開発部門第一領域長 山崎 誠)

# 現代語の 確立過程を調べる情報庫

## 自在に分析できる言葉の情報庫

言語学では最近、大量のデータをコンピュータの力を借りて精細に分析できる形に整備した、「コーパス」を活用する研究領域が注目されています。話したり書いたりされた生の言葉を、一定の方針に基づいて収集し、研究に有用な情報をあらかじめ埋め込んでおき、具体的な研究目的に応じて、さまざまな観点から自在に分析できる情報庫を共有していこう

図 「太陽コーパス」における文語記事と口語記事の比率



## 「太陽コーパス」の作成

近代化を経て現代語の書き言葉が確立するのは、大体二〇世紀初めです。その時期、多くの人々に読まれ、多彩な分野の日本語が反映している資料として、月刊の総合雑誌『太陽』（二八九五年〜一九二八年、博文館刊行）をあげることができます。国立国語研究所では、この『太陽』を対象とした「太陽コーパス」を作成し、CD-ROMによって刊行する準備を進めています。「太陽コーパス」は、一八九五年、一九〇一年、一九〇九年、一九一七年、一九二五年の五年分、六〇冊の全文

という方向です。日本語研究の拠点としての国立国語研究所にとって、日本語の良質な「コーパス」を整備していくことが、新たな重要課題になっており、現代日本語の多様な広がりをとらえ、その成り立ちを歴史的にとらえることができるような「コーパス」の構築を進めています。ここでは、現代語の確立過程を調べるための「コーパス」を紹介します。

を対象としており、おおよそ、三七〇〇記事、一三〇〇著者、一五〇〇万文字の規模になります。この「太陽コーパス」を用いることで、現代日本語ができていく過程を一目でとらえることが可能になります。

## 文語から口語へ

上に示したグラフは、「太陽コーパス」における文語記事と口語記事の比率を年別にまとめたものですが、日本語の書き言葉が文語から口語へ移行する全過程をとらえることができます。口語記事に使われる文末表現を調べてみると、当初は、デアリマス体、デゴザリマス体などの敬体が優勢であったところから、次第にデアル体、ダ体などの常体が一般化していく過程も具体的に知ることができます。

## 「頑張る」の登場

「太陽コーパス」で「頑張る」を引いてみると、一九〇一年までは例がなく、一九〇九年ではじめて現れ三例、一九一七年で八例、一九二五年で一四例と、次第に増加していきます。「頑張る」の語源は「眼張る」で、目を見張ることや、歌舞伎で見えを切る所作を表して近世から使われていた言葉ですが、困難に屈せず努力する意味に変化し、現代語として一般化していったものであることがわかります。

（研究開発部門第一領域主任研究員 田中牧郎）

# 「日本語の現在」をとらえる 最新情報の速報を目指して

## なぜ「日本語の現在」なのか

急速に変化する現代社会の言語問題に対応するためには、最新の情報に基づいて確かな議論を行う必要があります。国立国語研究所では、二年前から「外来語」言い換え提案を行っていますが、この活動にとって、外来語の現在の状況を的確に把握しておくことは、何よりも不可欠の前提条件でした。

一つ外来語に限らず、言葉に関するさまざまな議論を確実かつ健全に行うためには、総合的な観点から、大規模で将来に向けて継続性のある調査研究を設計する必要があります。現在まさに変化しつつある日本語の生の姿を正確にとらえることが、社会的にも学術的にも強く求められているのです。

平成一五年度から開始した「日本語の現在」をとらえる調査研究は、「最新情報」を「速報性」を重視して報告・提供することを強く志向しています。

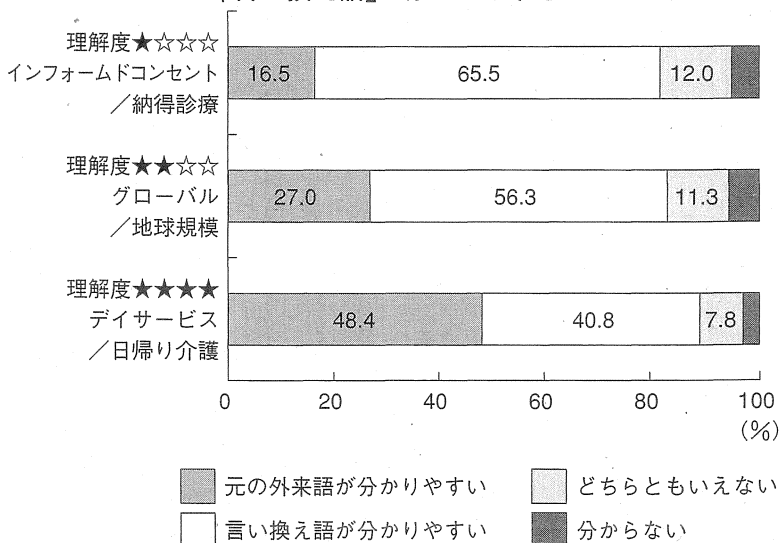
## どんな調査研究を行っているか

調査研究は、対象によって大きく二つに分かれます。一つは、言葉に関する国民の意識をさまざまな側面から探る「意識調査」、もう一つは、日本語の実際の在り方を新聞や雑誌などさまざまな媒体について探る「実態調査」です。意識調査の対象は日本語の使い手である国民各層、実態調査の対象は実際に使われている日本語そのものということになります。

## 例えばこんな成果が

下のグラフは、「外来語」委員会が提案した「言い換え語」と「元の外来語」とで、どちらが分かりやすいかを広く国民にたずねたものです。三語のうち、国民の理解度が最も低い段階の「インフォームドコンセント」は、言い換え語の「納得診療」を分かりやすいとする回答が圧倒的多数を占めています。また、理解度がその次に低い段階の「グローバル」も、言

「言い換え語」の分かりやすさ



い換え語の「地球規模」を分かりやすいとする回答が過半数を占めています。一方、理解度がすでに最も高い段階にある「ディサービス」は、言い換え語の「日帰り介護」よりも、元の外来語の方を分かりやすいとする回答が、若干多いという結果になりました。

このような調査結果は、「外来語」委員会が提案した個々の言い換え語が、どの程度まで有効であるのかを確認するための貴重な資料となっています。

(研究開発部門長 相澤正夫)

# ニホンがニッポンか

話し言葉としての日本語には読みが一定していない単語がたくさんあります。そもそも日本の国名がその一例です。お札を眺めると表には「日本銀行券」とあり、裏には NIPPON GINCO とありますから、ニッポンと読んでも構わないようですが、実際にはニホンギンコーと発音されることも多そうです。一体、ニホンとニッポンはどれぐらいの比率で使われているのでしょうか。

このような疑問を感じたとき、国語辞典類はあまり役にたちません。複数の発音の可能性が注記されていることもありますが、頻度に関する情報は示されていないからです。

## 話し言葉のデータベース

こういう問題を調べるためには、現実の話し言葉を大量に記録したデータベースが必要なのですが、残念なことにこれまで日本語にはそのようなデータベースがありませんでした。

しかし今は事情が変わりました。今年の六月に公開された『日本語話し言葉コーパス』が利用できるからです。『日本語話し言葉コーパス』は、国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学が協力して作り上げた話し言葉

のデータベースです。さまざまな学会での口頭発表の音声と一般的なスピーチの音声が一時間（約七五二万語）記録されており、さまざまな角度から検索することができます。実際の発音を聴取することもできます。

## 検索結果

実際に『日本語話し言葉コーパス』をつかって「日本」の発音を調べてみましょう。「日本」だけでなく、「日本」を含むすべての複合語（「日本人」「日本語」「日本海」「北日本」「比較日本人論」など）を検索してみると八二四二件見つかりました。そのうちニッポンと発音されているのは一九六件、二パーセント強にすぎません。ニホンの圧勝なのです。

もう少し詳しく調べてみるとニッポンと発音されやすい語があることがわかります。表に使用頻度が二〇以上でニッポンの比率がゼロでないものを示しました。

「日本一」と「日本代表」で比率が高いことがわかります。「日本」も四％程度はニッポンと発音されており、この語の使用頻度が図抜けて高いことよって、全体としてニッポンの比率が押しあげられていることもわかります。

単語	ニッポン	ニホン	ニッポンの%
日本一	9	31	22.5
日本代表	7	29	19.4
日本列島	1	24	4.0
日本	122	3108	3.8
西日本	1	30	3.2
日本語教育	2	64	3.0
日本人	19	1019	1.8
日本語	8	1591	0.5

ちなみに「日本銀行」は一回だけ出現していましたが（残念ながら）ニホンギンコーと発音されていました。

## 今後の課題

『日本語話し言葉コーパス』は質・量ともに現時点で世界最高水準の話し言葉データベースであり、日本語の発音を客観的に研究するための強力な武器となっています。また音声自動認識装置の開発にも利用されて、認識率を高めています。

しかし日本語の全体状況をとらえるためには、まだ量が不足しており、話し言葉のバラエティが不足していることも事実です。今後はより広い範囲の話し言葉を記録して、内容を充実させてゆく必要があります。

（研究開発部門第二領域長 前川喜久雄）

# 言葉の東西

## 東西対立

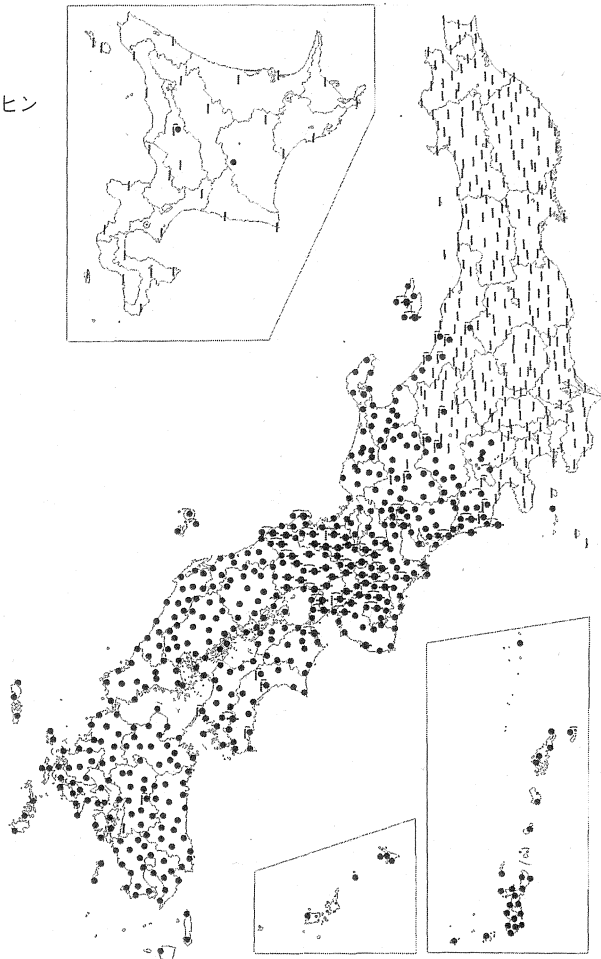
「〇〇のことを関西では△△と言う」といった言葉の東西差は、日常生活でもしばしば話題になります。日本の方言が東西に分かれる分布は「東西対立」と呼ばれます。

## ナイとン・ヘン

国立国語研究所が編集している『方言文法全国地図』から挙げた図1は東西対立の一例です。「書かない」のような打ち消しを表す「ない」を各地でどのように言うかを示しています。東のナイと西のン・ヘンにはつきりと分かれていきます。

図1 (書か)ーナイ『方言文法全国地図』第2集80図より

- ┆ーナイ
- ーン
- ✦ーセン・ヘン・ヒン
- ・その他

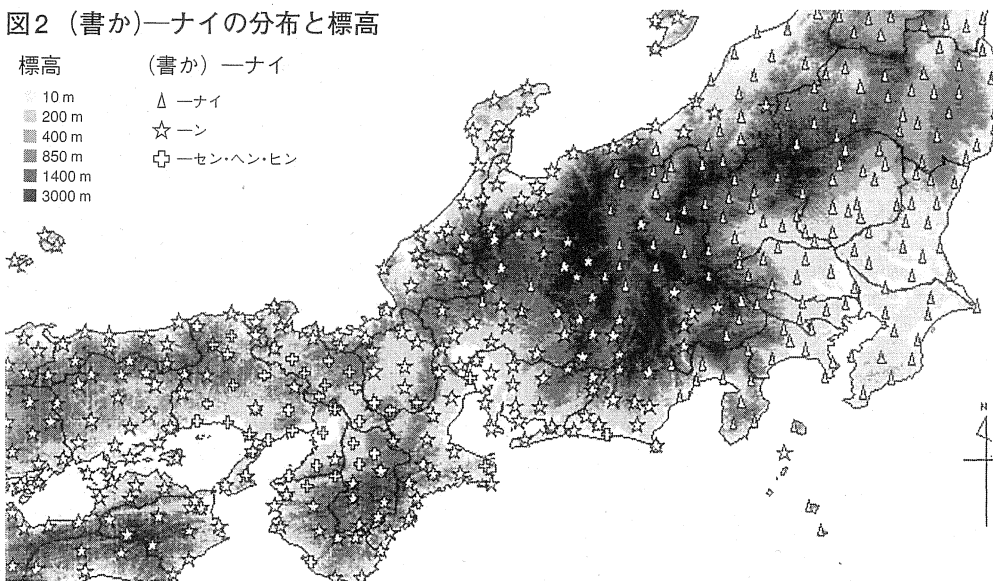


## 境界地帯を詳しく見る

図2は、東西の境界線付近を拡大し、標高と重ね合わせた地図です。境界線は、険しい山並みが連続する日本アルプスに平行していることが分かります。

図2 (書か)ーナイの分布と標高

- 標高
- 10 m
  - 200 m
  - 400 m
  - 850 m
  - 1400 m
  - 3000 m
- (書か)ーナイ
- △ーナイ
  - ☆ーン
  - ✦ーセン・ヘン・ヒン



このことは従来から漠然と指摘されてきたことですが、「地理情報システム」という技術を利用することで客観的に把握できるようになりました。すでに市場調査などの分野では不可欠な技術ですが、今後は、方言の研究でも大いに活用されることになるでしょう。

(研究開発部門第二領域主任研究員 大西拓一郎)

# 日本のふるるをいじらば

## 文化財としての方言

「オハヨーサンドス」(京都)

「オヒンナリ」(北陸など)

「ヤスマイヤローカ」(八丈島)

朝のあいさつ言葉ひとつをとっても、方言は多様な姿を見せてきました。特に意識をしなくても、地域での生活の基本となる話し言葉は方言でした。

しかし、昔から各地で使われてきた方言は急速に変化し衰退しています。このような状況の中、伝統的な方言を「文化財」ととらえ、できるだけ純粹な形で記録することが緊急で重要なことだと考えられています。

## 方言会話のデータベース

国立国語研究所では、各地の方言で自由に語られた自然な会話をまとめ、『全国方言談話データベース 日本のおもしろさ』と題して刊行中です。これは、文化庁「各地方方言収集緊急調査」(昭和五二〜六〇年度実施)で録音された資料がもとになって、おもに明治生まれの人たちの生き生きとした話し言葉

が収録されています。

各地の伝統的な方言を知ることができれば、かりではなく、「年末年始の行事」「子供の頃の遊び」「養蚕のこと」「大雪の話」といった会話の内容から、言葉の背景にある生活・文化・歴史・地理などが垣間見えるのも興味深いところではあります。

## 方言の実態を明らかにするために

方言を記録する目的は、消滅の危機にある言葉を保存するためだけではなく、生きた話し言葉である方言のしくみや働き、使われ方を明らかにするための貴重なデータとして、方言の記録が重要だと考えられています。

たとえば、「雨が降っているから行くのはやめる」の「から」にあたる部分は、方言地図や方言辞典などを見ると、「サカイ」「ケー」「ア」「ヨツテ」「ニ」などいろいろな言い方が報告されています。地域によっては複数の言い方をするところもあります。

これらは、実際の会話の中ではどのような使われているのでしょうか。方言会話のデータベースを使えば、各地の発音を聞くことがで

きますし、それを文字で確かめ、調べたい語を簡単に検索することもできます。

### 奈良県五條市における用例の一部

「シユミー モットルサカイナ」

(趣味をもっているからね)

「イタソヤツタカラナー」

(痛そうだったからね)

「シカクツチュヨナモン ナイヨツテニ」

(資格というようなもの「が」ないから)

## さまざまな角度から方言に迫る

方言の会話を使った分析では、たとえば、語が使われる文脈や現れる位置などから、語の使い分けのきまりを探し出そうとします。

また、言葉を使う人に焦点をあてて、男性と女性の言葉の違いを見たり、年配の人と若い人の言い方を比べ、言葉の変化の方向を考えたりもします。

話し言葉全体を対象として、イントネーション、会話の相手による言葉の切り替え、話題の展開のしかたなどを観察することもあります。

このように、記録された資料を活用し、さまざまな角度から分析を試みることによって、方言の研究の可能性はさらに広がっていくでしょう。

(情報資料部門第一領域主任研究員 井上文字)

# 国語を電話で聞く・答える

## 国語研究所の電話質問応答

国語研究所は毎日、「ことば（国語・日本語・言語）」に関する質問に電話で回答しています。記録上昭和四〇年度以来、各専門分野の研究者が対応してきましたが、現在はその経験を踏まえ、情報資料部門の質問応答専門の研究者が応答にあたり、どんな内容の質問がどれほどあるか、誰がどう答えたかを網羅的に安全に記録蓄積し、検索利用できるように目指しています。

## 質問者の属性

二〇〇三年度の質問者属性は大きく三分できます。図1のように、半分近くは個人から

図1 電話質問者の属性

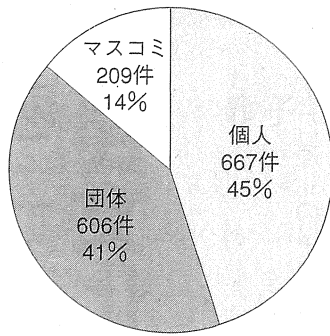


図2 質問者属性「団体」の内訳

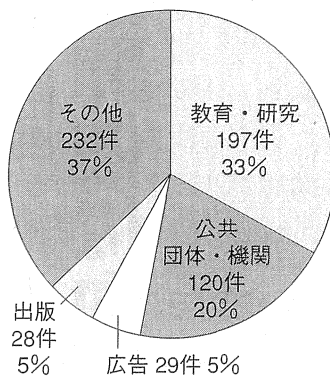
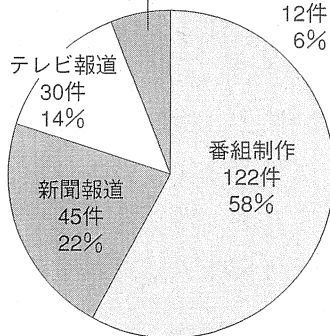


図3 質問者属性「マスコミ」の内訳



です。仕事上の質問を個人で聞く、先生が自分を明かさずに聞く場合も含まれています。一方、企業や官公庁など所属を明かす人が、団体とマスコミを合わせて半数以上です。言葉の問題は個人的な世界かという点、実際は社会生活上の問題であると知られます。

## 言葉のプロからの質問

次に団体の中の内訳を図2に見ます。半数は、教育・研究、公共団体・機関からの質問です。広告や出版など言葉のプロからの質問も一割をしめています。責任をもって言葉を扱う必要に迫られた状況が見えてきます。「マスコミ」（図3）では、制作の発想そのものをたずねるケースなどもあって、番組制作

が半数以上です。中にはクイズの正解や、出題の是非を聞く場合があります。営利事業を公共サービスで解決しようという姿勢自体に疑問もあり、初期調査の周知徹底を申し入れることがあります。

一方、報道担当から文字や言葉遣い、意味用法をたずねるなどが三分の一あります。裏腹に、マスコミへの意見が多いことも事実です。発信する側が気をつかうようになって、受ける側は、依然ひどい言葉がばらまかれて困る、と感じているという図式でしょうか。

## 迷う言葉

質問内容は多岐にわたります。漢字の音訓にしても、字形だけわかってよみ方や意味に見当のつかないものや、名付けをしようと人名の訓を求められたりします。これらは、ある程度辞書や文献資料で解決のつくことです。最近では、同じ漢字表記に複数の「よみかた」があるものを、どれが一番よいか、という質問があります。学校の先生から音読を指導するための場合もありますし、録音や対面での朗読や点訳奉仕の現場から迷いを相談されることもあります。さらにテレビ番組やビデオ制作で字幕をつける必要から、という場合も増えています。いわば話し言葉と書き言葉の接点にある問題が新たに起こっているのです。

（情報資料部門第二領域主任研究員 山田貞雄）



# 海外における 日本語学習の実態をとらえる

## 学習者の増加と多様化

二三五万人。これは、海外で日本語を学んでいる人の数です（二〇〇三年、国際交流基金調べ）。この二〇年間で約四倍の伸びを示しましたが、最近の傾向として、日本のアニメやゲームをきっかけに、日本語の学習を始めた、という学習者が増えたことが挙げられます。数の増加とともに、学習者の多様化も進んだわけですが、彼らはいったい、どのような教材や手段を用いて、日本語を学んでいるのでしょうか。

## 学習手段の多様化

近年、インターネット等の通信技術の発達により、海外でも生の日本語に触れることが容易になりました。また、ホームページで日本語を読む際に、漢字に振り仮名を付けてくれるソフト、言葉の意味・用法を教えてくれるソフトなどが開発され、漢字や文法の壁に、いわば「はしご」をかけることも可能となっています。

## なぜ「リソース」調査か？

国立国語研究所は、日本語学習者を巡る環境が大きく変化しつつあることに注目し、彼らがどのような物、人、機会に接し、それらを「リソース」（学習資源）としてどのように用いているのか、日本及び海外五か国において調査しています。この調査は、これまでの調査研究や教材開発が、「教えるために何をどう準備し構成するか」という発想の下でなされることが多かったのに対し、「学習者は何をどう学んでいるか」という学習者の視点を中心に据えた研究です。活用されているものについて調べつつ、逆に、様々なリソースが活用されない原因は何なのか、学習者にとって本当に必要なものは何か、日本語教師の果たすべき役割は何か、などを明らかにすることを目指しています。

## 「チャット」の可能性

アンケート調査の結果、韓国や台湾では、「チャット」がかなり利用されているというこ

図1 「知り合い」とのやりとりで用いる手段（韓国）

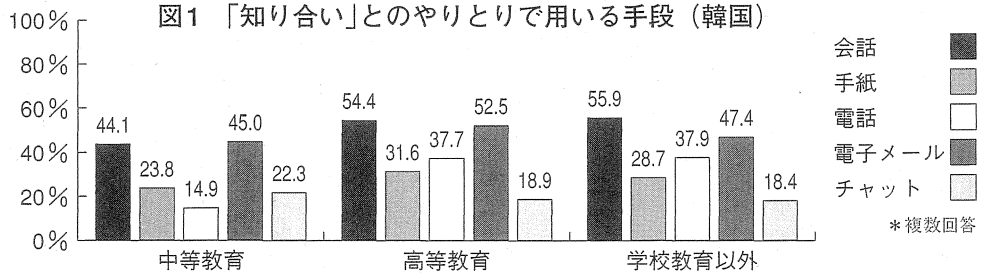
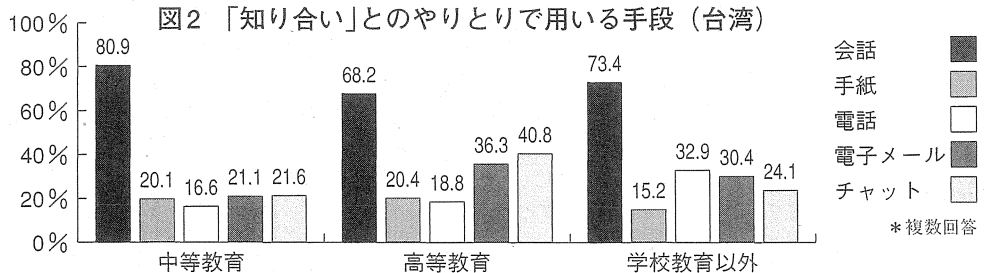


図2 「知り合い」とのやりとりで用いる手段（台湾）



とがわかりました。利用方法をより詳しく知るために、相手、頻度、内容等による比較分析をしています。これは、通信技術の発達で、言語学習の手段や学習意欲の保持に大きな影響を与えていることを示す一例と言えます。ではないでしょうか。

（日本語教育部門第一領域主任研究員 金田智子）

# 新しい日本語学習環境の整備

## 世界の日本語学習者

平成一五年の国際交流基金の調査によると、一二〇か国七地域で二三〇万人以上の人が学習しています。その六割は、初等中等教育の児童生徒です。高校や大学の入試科目に採り入れた国もあります。

## 新しい資源と課題

これまで、日本語学習の目的は、留学や就職などの実利的な面が強かったのですが、日本の漫画、アニメ、ドラマ、映画、ゲームや音楽が、日本語学習の新しい動機付けとなっています。今は、海外にいながら衛星放送やインターネットで、ファッションや歌やドラマをはじめ、日本の様々な情報を入手しています。

海外の学習者が自国で日本のテレビ番組を見て不思議に思ったことがあったとします。これまででは教師と辞書と周囲の日本人が拠り所でした。情報通信社会では、ホームページで使い方の用例を調べたり、電子メールやメーリングリストや掲示板で質問したりといったことが簡単にできます。さらに、複数の人がインターネット経由のテレビ電話で複数の言語で

書かれた資料を見ながら話し合うことができます。

しかし、問題がないわけではありません。調べる素材や情報は誰が作るのでしょうか。電子メールや掲示板による情報は信頼できるのでしょうか。自国と日本との間で意見交換する関係をどうやって作ればよいのでしょうか。

海外にいても教室で自由に使える日本語学習素材を簡単に入手したい、教え方の情報交換をしたい、といった海外の教師の声もあり



多言語対応のテレビ電話の画面

ます。外国のコンピュータで日本語によるキーワード検索ができない、電子メールの日本語が文字化けして読めない、日本語の文書を印刷できないといったコンピュータ上の問題もあります。

## e-Japan事業への取組

コンピュータは、外国語学習における教師の役割の再考や、学習者の自律的な学習を促す新しい環境を生み出す可能性を持っています。

そこで、国立国語研究所では、平成一四年度から政府のe-Japan事業に四年計画で参加し、日本語の理解に役立つ電子化素材や情報といった資源を日本と海外の関係者八〇名余で開発し、順次発信しています。また、前述の諸問題の解決のための指導や、コンピュータ利用による学習効果研究も国際共同で行っています。

作成した電子化素材や情報の一例を挙げると、日本人の日常生活素材（動画、静止画、会話）、漢字の読みの出現頻度、擬音語・擬態語の用例、学校教科書の国際比較、無料テレビ電話、ローマ字で入力し結果を日本語で見る電子辞書、マルチメディア教材やカラオケ字幕付き動画の作成ソフトや発声訓練ソフトなどがあります。[<http://www.kokken.go.jp/ejapan/>]にアクセスしてご覧ください。

(日本語教育部門第二領域長 柳澤好昭)

# 「外来語」言い換え提案は どう受け止められているか

これまでに三回の提案を行いました

国立国語研究所では、平成一四年八月に「外来語」委員会を設置し、分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫について検討を重ねてきました。その成果は、これまでに三回、合計一四一語についての「外来語」言い換え提案として公表しています。

三回の内訳は、第一回（平成一五年四月）が六二語、第二回（平成一五年一月）が四七語、第三回（平成一六年一〇月）が三二語となっています。しだいに語数が減っているのは、言い換えの対象とする外来語の数を増やすよりも、一つ一つの外来語について丁寧かつ慎重に検討することを大事にしようとする姿勢が、回を追うごとに委員会の中ではつきりとしてきたためです。

**提案は言い換え語の一覧表だけでは  
ありません**

この提案は、しばしば世の中では「分かりにくい外来語とその言い換え語を列挙した一

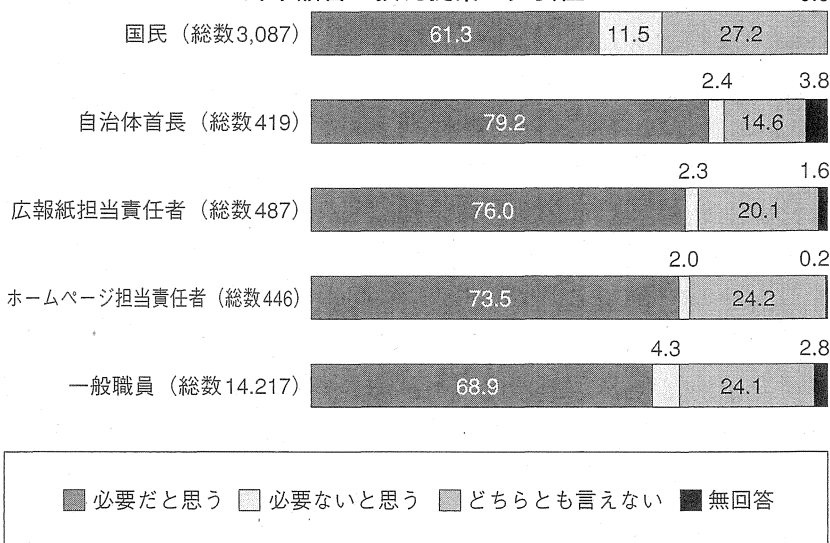
覧表」として、かなり狭く限定された形で理解されているようです。「言い換え提案」という名称から、そのような誤解が生まれているかも知れませんが、実際には、個々の外来語に対する言い換え語の提案にとどまることなく、分かりやすい言葉遣いの工夫に役立つ情報を、様々な角度から広く提供しています。

**提案は広く支持されています**

提案の目的は、情報の送り手である官公庁や報道機関など公共性の高い組織が、受け手である国民に分かりやすく伝える工夫をするための、基本的な考え方と基礎資料を提供することにあります。

研究所では、平成一五年秋に「外来語」言い換え提案の必要性について、国民各層と全自治体の首長、職員に尋ねました。結果は下のグラフのとおりです。国民全体の六割強、自治体首長の約八割、広報紙担当責任者とホームページ担当責任者では七割超、一般職員でも七割弱の人が「必要だと思う」と回答しています。

外来語言い換え提案の必要性



このように、「外来語」言い換え提案は、円滑な公共コミュニケーションにとって障害となる外来語の問題への対応策として、国民からも自治体からも要請度が高く、広く支持されていると言ってよいでしょう。

なお、「外来語」言い換え提案に関する各種情報の詳細については、国立国語研究所のホームページを参照ください。(http://www.kokken.go.jp) (研究開発部門長 相澤正夫)